文章を書くこと　～神戸新聞「若者 BOX 席」投稿～

神戸新聞の「若者ＢＯＸ席」に本校３年生の桑形希美さんの投稿が掲載されました。

桑形さんは、短大を受験するにあたって、小論文対策として自分の考えを原稿用紙２枚にまとめる練習をたくさん行いました。放課後や休日に書いた文章を学校に持ってきて先生方に見てもらい、言葉の使い方は適切か、論旨が一貫しているか、言いたいことが明確に伝えられているかなどのアドバイスを受けながら文章の書き方を学びました。

文章を書くという作業は、なかなか大変な作業です。それは、「書く」ということが「考える」ということに他ならないからです。桑形さんは、小論文の練習をとおして、ほかの人に自分の考えを伝えるためには、自分の言いたいことを簡潔にまとめてそれに具体例や理由を加え、順序立てて段落を構成し、論理的に説明するという方法を学びました。以前は 800 字（原稿用紙２枚）の文章を書くのはとても大変だったけど、文章を書くことに対する苦手意識がなくなり、実際の試験でも時間内に小論文を書くことができたと言っていました。

小論文の練習で書いた文章の中から一つを選んで、400 字にまとめ直して神戸新聞社に投稿したものが２月４日の朝刊に載りました。簡潔かつ明快な文章です。

（校長　高橋信之）

若者Box席

人間が議論して技術活用を

桑形　希美　18歳
（高校生　丹波市）

スマートフォンなど10年前には存在しなかったものが実用化され便利になり、技術は日々非常に進歩している。しかし技術の進歩がもたらすものは良いものだけではないと思う。例えば技術が人間の仕事を奪い、人工知能（ＡＩ）が人間を支配する不安や心配、危険性が指摘されている。

技術は可能か不可能かではなく、その技術は本当に必要なことなのかを十分に検討し議論する必要があると私は思う。物事を決める時には、たとえ技術を利用したりＡＩに頼ったりするとしても最終的には人間が決断するべきであると思う。

「１本のナイフはパンを切るためにも喉を切るためにも使用できる」という言葉があるが、このように便利なものでも使い方を間違えると危険なものになる。技術の進歩を悪用し危険なものにするのではなく、人間が検討したり議論をしたり判断することで技術の進歩を生かすことができる。そんな社会になってほしいと私は思う。